

アンダの花嫁

—コモロにおける女性と結婚—

花 淵 馨 也

●アンダの大結婚式

東アフリカとマダガスカルの間、モザンビーク海峡に浮かぶ四つの島からなるコモロ諸島には、コモロ語を話し、イスラーム教徒であるコモロ人と呼ばれる人々が住んでいる。コモロ諸島のなかでも一番大きなンガジジャ島の社会は母系制の特徴をもっており、ダホと呼ばれる母系出自集団のまとまりが強い。ダホの共有するマニヤフリという土地や家屋は母系的に相続され、妻方居住婚が行われているため、結婚すると花嫁は花嫁の実家に婿入りし、妻の母系親族集団のなかで暮らすことになる。婿入りのよそ者であり、しばしば離婚することで家族から離れてしまうことも多い父親に対し、家族の結びつきは土地と家を所有し、母系親族のなかで暮らす母親と子供を中心としている。

しかし、母系制であるから女性の社会的地位が高いというわけではない。イスラーム社会でもあるため、公的領域だけでなく、家庭内でも男性優位で家父長的な傾向が強い。結婚に関しても、娘の結婚相手は、父親やダホの長である母方オジが決めることが多く、逆らうことは許されていない。とりわけ、アンダという慣習による結婚では、親の選択により、若い娘が年の離れた男性と結婚させられることが多くみられる。

アンダとは、村を単位とした男性の年齢階梯制のことである。アンダは、六つの階梯をもつ「村の子供」（ワナ・ムジ）と、五つの階梯をもつ「父なる者たち」（ワンドウ・ワババ）の階層から成る。男性は「村の子供」から、「父なる者たち」の階層に上るために、生涯に一度「大結婚式」（ンドラ・

ンク）を行わなければならない。アンダの大結婚式は村の男性の義務であり大きな名誉とされ、それを成就することで男は「一人前の大人」（ワンドウ・ワズイマ）とみなされ、「父なる者たち」にのみ許された豪華な衣装を身に着け、村の集会で発言する権利をもつことができる。

大結婚式を実施するには多額の資金が必要である。大結婚式は村全体に結婚式の開始を告げるウバインシヨという行事が始まり、その一週間後に花嫁が花嫁の家に入り、初夜の日から数えて九日目までの二週間以上続く。この長い期間に、花嫁側と花嫁側がさまざまな贈与交換をくり返すだけでなく、アンダの成員や村人全員に対して肉やお菓子や食事などがふるまわれ、マジリシというイスラームの祈禱式や、ターラブというダ

ンスパーティーなどさまざまな祝いの行事が開催される。大結婚式を行うために、花嫁側は多額の婚資や金の装飾品、家具や衣装などを準備しなければならない。また、妻方居住婚なので花嫁側が新居を用意しなければならない。その建築費用のほかにも花嫁側への贈り物や提供する食事のための米や肉などを準備しなければならない。

お金を持たない若者が大結婚式を実現するのはたいへん困難である。そこで、一般に、男性は若い時にイスラーム法に則った身内だけの「小さな結婚式」（ムナ・ダホ）で一度結婚し家庭をもち、四〇代後半から五〇代になり大結婚式の資金が準備できると大結婚式を行うことが多い。

このとき、長年連れ添った妻と大結婚式を挙げることもあるが、第二夫人として新たに若い妻と結婚するケースや、妻と離婚して新たに若い女性と結婚するというケースもある。アンダの結婚では、一〇代の若い娘と五〇歳を過ぎた男性が結婚することもめずらしくない。長女はアンダで結婚させなければならぬという慣習があり、その義務を果たさない親は社会的に非難される。そのため、



伝統的衣装を着たアンダの花婿と花嫁 (著者撮影)

長女をもつ親は、娘が年をとりすぎて行き遅れる前に、早くアンダで結婚させてしまおうとする傾向がある。長女が生まれると、親は、すぐに家の建築や牛を買うための資金準備を始め、また幼少の時に、親が将来の花婿と婚約を結ぶこともしばしばある。

かつて、アンダの花嫁は処女であることが条件とされていた。アンダの結婚式を行う前には、親族の女性によって花嫁の処女膜の検査が行われ、初夜の後は、流された血液のついたシーツを花嫁の父親が家の外に広げ、娘の名譽を公に証明してみせるということも行われていた。アンダでの結婚が義務付けられた長女は、箱入り娘として幼い頃から両親や男兄弟た

ちの強い監視のもとに置かれ、日中はほとんど家から出ることを許されていなかったという。

●高校生の花嫁

アンジザはンガジジャ島の小さな漁村に住む二一歳の女性で、まだリセ（高校）の三年生である。二〇一四年の八月に、フランスに住む同じ村出身の五四歳の男性モハメッドとアンダの大結婚式を行う予定である。

相手のモハメッドは初婚ではなく、アンジザはモハメッドの第二夫人として結婚する。モハメッドは村で若い時に結婚し、二人の子供をもうけたが、その後離婚し、一九九三年に親戚が住んでいたフランスに渡った。長くフランスのマルセイユ市に住んでおり、レストランで皿洗いの仕事をしている。フランスで別の村出身の女性と結婚し、三人の子供もいる。フランスで子供をもうけたことで、モハメッドはフランス国籍を取得し、フランスとコモロの二重国籍をもつ。現在の妻も再婚であり、彼女は前の夫と結婚したときにアンダを行っている。フランスに渡って二〇年あまり、いつかアンダを行うために、安い給料のな

かから少しずつお金を貯めてきたのだという。

フランスでは重婚は禁止されているが、コモロはイスラム社会なので一夫多妻が認められている。役所に婚姻届を出すことはほとんどないので、事実上、フランスに住むコモロ人移民は一夫多妻をすることができるといわれる。ただし、やはり妻同士の嫉妬はある。モハメッドがアンジザとの結婚を言い出したときには、夫婦の間でかなりもめたようだ。しかし、モハメッドもすでに五〇歳を越え、「村の子供」の階梯のなかでも最上階に属しており、長年恥ずかしい思いをしていたので、なんとか妻を説得して結婚を認めさせたのだという。「二人の妻をもつのはたいへんだよ。でも、若くて美人な妻と結婚するのはうれしいよ。アンダで若い妻と結婚するのはコモロの男の名譽なんだよ。」現在の妻がない時に、モハメッドはにやけた顔でこんな風に言っていた。

アンジザはまだ一七歳だった時、モハメッドの妹がアンジザの母方オジとアンダで結婚し、その結婚式でアンジザを見初めたモハメッドが、その母方オジに婚約を申し込んだ。承知したオジがアン

ジザの母親に話をし、母親から結婚をすすめられたアンジザは婚約を承諾した。フランスに住むモハメッドはめったに村に帰郷しないので、二人がこれまで会ったのは数回だけであり、相手のことはよく知らないらしい。それでも、「コモロの女性はアンダで結婚するのが習慣だから、母親がそうであったように自分もそれに従う」のだという。

アンジザの大結婚式をサポートするのは、実の母親ではなく、アンジザの母方オバである。女性には男性のアンダのような年齢階梯制はないがベヤという互助グループがあり、女性が自分の娘をアンダで結婚させる時には、ベヤの女性メンバーが大結婚式の料理や花嫁の世話などを行う。女性が長女をアンダで結婚させることはベヤの互酬的義務だとされており、娘をアンダで結婚させた母親は「アンダの母親」と呼ばれるようになる。娘のアンダを果たせないことは女性にとって恥とされ、ベヤの成員から公然と揶揄されることもある。

アンジザの母親の姉であるオバには娘がいなかったため、母親としてアンダを行うことができなかった

た。そのため、妹の娘であるアンジザを実の母親の代わりにアンダで結婚させてアンダの母親になろうというのだ。実の母親もまだ娘のアンダを行っていないが、彼女には娘が三人いるので次の娘の結婚は自分が行うという。コモロ社会では、母親の姉妹も母親と同じく「ムザゼ」と呼ばれ、母親と同等な存在とみなされているので、このような代替が認められる。

アンジザは五人の兄弟と三人の姉妹の八人キョウダイで、姉妹のなかでは次女である。長女は大学生で、婚約者はいるがまだ結婚していない。アンジザの三人の兄たちがフランスで暮らしており、お金を送金してくれたおかげで、アンジザの家族は花嫁の新居を建築することができ、大結婚式の準備を整えることができた。

しかし、結婚してもアンジザは新居に住むのではなく、実家で暮らすのだという。新居には代わりに兄夫婦が住む予定だ。モハメッドは結婚後も現在の妻子とともにマルセイユに住むが、アンジザはコモロ大学に進学して観光学について勉強するため村に残り、大学を卒業したら、いずれフランスに渡って仕事をみつけないと考

えている。モハメッドもそれを認めているが、実は、フランスで二人の妻と子供を養うのは大変だし、妻同士のもめごとを避けたいからというのが本音らしい。

●移民がもたらす変化

コモロ諸島は一九世紀半ばにフランスによって植民地化され、一九七五年になって独立を果たした。しかし、独立以降は度重なるクーデタや汚職などによって不安定な政治が続き、これといった資源も、産業もないため経済的發展も低迷してきた。コモロの困窮した状況を背景として、九〇年代以降フランスに移民する人々が急激に増加し、現在では推定三〇万人以上がフランスに暮らしている。特にモハメッドの住むマルセイユ市には約八万人のコモロ人移民が住んでおり、今ではコモロの「第五の島」などといわれている。アンジザの住む村でも人口二〇〇〇人のうち八〇〇名ほどがフランスに住んでいる。

移民たちは、同郷組合を組織し、活発に村への援助活動を行っており、道路や水道の整備、モスクや広場の建築など村の公共事業のほとんどを担っている。海外移民が

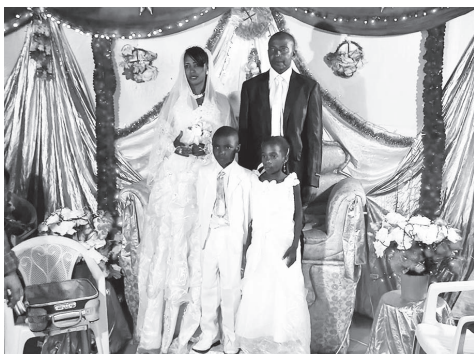
故郷に送金する金額は、コモロの国家予算の二倍以上にもなるといふ推計もあり、今では、村の生活は移民による経済的援助なしには成立しない状況となっている。

コモロ人移民がコモロにもっとも多くのお金を故郷に落とすのは、アンダが開催される時期である。ンガジジャ島の村々では、毎年、八月のヴァカンスの時期になるとフランスに住む移民が一斉に帰郷し、毎日のように村をあげてアンダの大結婚式が開催される。この時期には大量の米や牛肉などが蕩尽的に消費されるため、そのコモロ経済への影響はとて大きい。

一九九〇年代以降、移民の経済力や彼らが持ち込む西欧文化の影響によって、アンダは大きく変化してきた。故郷に錦を飾りたいという移民の見栄の張合いによって、花婿の支払う婚資や金の装飾品の費用も、花嫁側が用意する贈り物の費用も、村人たちへの御馳走やお菓子の費用もすべて高くなり、アンダにかかる費用は高額化してきた。また、オマーンの王族が着ていた衣装を模倣した豪華な金刺繍の衣装が取り入れられたり、花婿と花嫁が西欧的なフォー

マルスーツとウェディングドレスを着て行われる華やかなパーティーが導入されたりと、より派手で、豪華な結婚式が行われるようになってきた。

大結婚式の見栄えだけでなく、結婚のあり方にも変化が生じてきている。かつては、年齢を重ねてある程度財力をもたないと大結婚式を行うことはできなかったが、公務員や政治家、商人など若くして経済力をもつようになった世代や、フランスに移民してある程度お金を貯めた若者が、現金収入のない年配の世代を追い越して大結婚式を行うケースが増えてきている。若くしてアンダの階梯の上位に上るものが出てくる一方で、いつまでも「大人」の階梯に登れない年長者も増えているのだ。そのため、アンダにおける長幼の序列の規則も変化してきており、かつては、母系親族集団のなかで年配の男性から順にアンダを行うという規則があったが、この順序が守られないケースもでてきている。また、長女のみがアンダの結婚式を行うという規則も変化し、アンジザの場合のように次女を長女よりも先にアンダで結婚させたり、長女だけでなく、全ての姉妹をア



西欧風の結婚パーティー（著者撮影）

ンダで結婚させるといふケースが多くなってきている。

娘たちをすべてアンダで結婚させるためには、それぞれの娘に新築の家を用意し、大結婚式の資金を用意する必要があるが、その実現に大きな影響力をもっているのが移民女性たちである。すでに一九六〇年代から、一部の男性はアンダの資金を稼ぐために、単身でフランスに出稼ぎにでかけ、資金が貯まると帰郷し、すべての蓄えをアンダで使い果たすということがあった。しかし、九〇年代以降になるとフランスに定住した移民の家族呼び寄せにより女性の移民が増えてきた。フランスで仕事をみつけ、自らお金を稼ぐ女性たちも多くなった。また、女性の場合

は、無職であっても未婚で子供がいるシングルマザーだと、安い賃金で働く男性よりも高額のフランスの社会保障給付金をもらえることもある。そのような女性がお金を貯め、自ら夫の分の資金も用意して自分のアンダの結婚式を行ったり、自分の娘たちや息子たちの大結婚式を行ったりすることが増えてきているのだ。

娘をもつ移民たちはアンダの資金が用意できると、村にひときわ大きなブロックの家を建築する。しかし、アンダの結婚式を終えると、ほとんどの移民はフランスに帰ってしまうため、現在ンガジジャ島の村々には、人の住んでいない大きな新築の家がたくさんられる。

●フランスという選択

アンダで結婚する若い娘たちの考え方も変わってきているようだ。聞くと、アンジザは処女ではないという。今では処女検査のよくなることは行われておらず、処女であることがアンダの花嫁の条件ではなくなっている。アンジザによれば、「むしろ、処女じゃないのが普通だし、処女じゃないほうがよいというのが、今のンガジ

ジャ島の考え方よ」ということらしい。

さらに、アンジザはモハメッドとの結婚は、自分の人生にとってひとつの手段だと考えているようでもある。「モハメッドと結婚すれば、フランス国籍を取得できるし、アンダも済ますことができるわ。私は将来フランスで暮らしたいと思っているの。でも、フランスに行つてモハメッドと暮らすかどうかは分からないわ。私のイトコムフランスに住む六〇代のおじいさんと結婚したけど、アンダが終わったらすぐ離婚しちゃったの。私もいつかはモハメッドと離婚したつてかまわないって考えているの。」モハメッドには秘密だとしながら、アンジザはこう明かしてくれた。

花嫁たちの話を聞いてみると、アンダの結婚が必ずしも強制的な結婚だとはいえない側面もみえてくる。現在では、コモロ社会でも自由恋愛による結婚が増えているが、アンジザのような若い世代でも、大結婚式を行うべきだとする考えは依然として強くある。だが、女性にとつてアンダの結婚相手の選択は限られている。男性も女性も自分の村でアンダを行うために

同じ村の出身者と大結婚式を行う傾向があるが、小さな村で大結婚式を実現できる資金をもつ男性はそう多くない。若い女性にしても、うかうかしていると行き遅れて、アンダの花嫁になりそこなうかもしれない。そのため、母親は娘が若いうちにアンダで結婚させてしまおうとするし、娘の方でも早くアンダを済ませてしまおうとし、年配の男性との結婚を承諾するのだ。

一度アンダをやってしまったら、離婚してもその地位は変わらない。かなり年配者であっても、花嫁が多少のお金と、さらにフランス国籍をもっていることは大きなメリットである。フランスでの暮らしは若い娘にとつては大きな魅力であり、村から出て、人生を切り拓くための大きなチャンスである。アンダの結婚を受け入れることで、アンジザも自分の人生をそのチャンスに賭けてみたのだ。

※写真の人物はいずれも本文の内容とは無関係である。

（はなぶち けいや／北海道医療大学看護福祉学部教授）